NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS

B!E

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS ART & DESIGN CENTER NEWS 2016. Vol.45

絵本の可能性

Possibility of a picture book

絵本は誰のためのものか。赤ちゃんと子どものための本？いいえ決してそれだけではないと思います。かつて子どもだった人たちへ、過去の自分を通して新たな出会いをも期待します。絵本作家、三浦太郎さんは読者の心理に丁寧に寄り添いながらも、実験的で新しい試みに絶えず挑戦しています。三浦さんのこれまでとこれからを通して、絵本の可能性を考えてみたいと思います。

本屋さんに生まれて

実家は商店街の本屋さん。教科書を扱っている古い本屋で、いつも本に囲まれて暮らしていました。今こうして絵本を描く仕事をしていて、結局、本から逃げられないんだなと思ったりします。

高校生の時、とりあえず大学には行きたい、一人暮らしもしたいと思い、絵は得意だったので美術系大学の受験を考え始めました。いざ大学に入ったら絵を描く仕事もしてみたいと考えるようになり、親には、イラストの仕事で独り立ちできなければ、実家に戻って本屋を継ぐと宣言し、卒業後は東京でイラストレーターを目指したのです。

イラストレーター時代

イラストレーターとしては決して成功したとは思っていません。でもすべてが今の自分の基礎になっています。デザインは共同作業ですから、クライアントやアートディレクターの求めている物は何かを汲み取りながらイラストを描いていると、あっという間に山のように仕事を抱えるようになり、この時期は、朝から晩まで死ぬほど絵を描いていました。でも、頑張りすぎて最終的には身体を壊してしまったのです。その後、今までの仕事を整理して、もう少し自分自身の仕事として残る物が作りたいと思ったのです。そんな時、出会ったのが絵本の世界です。広告デザインやイラストは時代とともに消費され、あっという間に古くなってしまいますが、絵本は開いた時がいつも新鮮で、時間がたっても変わらない世界観が閉じ込められているように思うのです。

絵本の可能性

Possibility of a picture book

ボローニャ国際絵本原画展への挑戦

初めてボローニャ展を見たときに、この世界なら自分の絵が受け入れられる、と直感で思いました。ボローニャ展は世界的にも有名な絵本のイラストレーション展で、日本の公募展にはない雰囲気がありました。応募して２年目に入選。初めて現地に行き、世界各国の絵本に触れて、おもしろいな、もう少し続けてみよう、と思ったのです。これ以降この展覧会で6度の入選を果たし、すべての入選作品が絵本として出版されています。絵本の出版経験がなくても欧米の編集者は、“作家”として対等に仕事を進めてくれました。“経験がないこと”は弱みではなく、今でも一番の強みなのではないかと思っています。

※ボローニャ国際絵本原画展
1967年イタリアの古都ボローニャにて、子どもの本のイラストレーションを紹介することを目的にスタートしました。子どもの本のために描かれた作品であれば誰でも応募できることから、新人イラストレーターの登竜門として知られ、これをきっかけに多くの絵本作家が生まれている。

絵本、デザイン、アート、これから

僕のやっていることは、デザインの世界からだと絵本でしょ？子ども相手でしょ？って思われてしまいがちで、アートの世界からも同じような位置付けです。最近は少し変わってきていますが、日本にはそういう雰囲気がまだあります。海外では絵本に対して、こういった偏った見方が無く真っ平な印象。絵本は表現の一つでやはり“アート”なのです。今の自分は縁あって絵本のジャンルに立っているので、それなら自分でこのイメージを楽しみながら変えていけるのではないかと思うのです。絵本作家としてなら、普通は絵本から出発して、次にワークショップをする、という流れが正しいと思いますが、僕は逆のパターンも挑戦してみたい。実験的にいろいろなサンプリングをしてみて、ワークショップになるかもしれないし、それを見た編集者が絵本にしてみたいと思うかもしれない。絵本作家だから絵本しか作ってはいけない、なんてことはないでしょうから、面白いと思うことはどんどん形にしていこうと思います。。

『くっついた』こぐま社

「くっついた」、赤ちゃん絵本のスタート

日本で初めて描いた絵本が「くっついた」です。それ以前にスイスで『Je suis...』、イタリアで『TON』という本を出版していました。当時、外国みたいな本は日本では売れないと日本の編集者に言われ、また海外で出版された絵本のタッチをそのまま日本で出すこともできず悩んでいました。そんな時、ちょうど自分の子どもが生まれ、娘との触れ合いの中で、できたのが、この『くっついた』です。日本の読者にも受け入れられるように新しいタッチを模索し、かわいくシンプルな表現にしました。今までにないタイプの赤ちゃん絵本として好評となり、他の出版社からも声が掛かるようになりました。その結果、日本では赤ちゃんを多く手がけることになったのです。赤ちゃん絵本を作っていておもしろいのは、“絵本を読んだ赤ちゃんが何を思っているか誰も分からない”、そこがアートだなって（笑）。頭で考えても分からないところなので、これからも対決していきたい。作っていきたいと思うのです。

『joie de lire』La Joie De Lire/スイス

絵本を出版するということ

絵本ができる過程で、僕の中に勝手な編集者や出版社のカラーがあって、こういうアイデアならこの出版社で出そうか。シャープな感じに仕上がったから、こういうのが好きそうなのはあの人のところだな、といった具合に、出版社を決めています。海外の絵本のマーケットからすると、日本は少し独自路線ですが、日本はこれだけ本が売れていて、一部の絵本作家だけですが、それだけで食べていける。経済的にも豊かだということもあるけど、それは本当にすばらしいことです。子どもに絵本を読もうという意識も豊富ですし、もっと日本の絵本の環境も、自分の仕事の環境もよくしていきたい。いずれは海外で出版しているようなものを日本の絵本として出したいと思っています。日本でデザイン的な本を出しても売れないのはわかりますが、日本の出版社で出すことは、今後、日本の絵本作りの可能性を広げていけるのではないかと考えています。

美術学部企画

「版の方法論25×25=75」展

2016年7月25日［月］・26日［火］

KMTILキャンパス内の"Top Ten Asean"キャンペーン看板の前のカンジャナ先生、ダンカン先生、西村

7月に、本学と姉妹校提携を結んでいる2大学を繋げる表題の版画展を開催しました。

その2大学とはイギリスのブライトン大学(UoB)とタイのキングモンクット工科大学(KMTIL)です。UoBとは学生の交換留学を20年来継続し、KMTILとは正式に姉妹校提携をする以前から版画コース間の人的交流と展覧会を双方の大学で10年近く継続してきた実績があります。

本展は元々KMTILと本学の2校間の教員、OB、学生の交流展「25×25=50」として企画していましたが、UoBとの交流20周年も記念して3大学の交流に拡大しました。

各大学から紙サイズ50×50cmの版画を25点ずつ選び、まずは本学アート＆デザインセンターでの展示となりました。KMTILからは版画のカンジャナ・ダムソピー先生を筆頭に絵画科、建築科の教員7名、学生3名(本学に留学中の1名も含む)が来日、UoBからは美術学部長のダンカン・ビュレン先生が来日し、展覧会初日のシンポジウムとアーティスト・トーク、2週間の会期中には各大学が担当して学生対象に紙すき、銅版画、リトグラフのワークショップを、また高校生対象にモノプリントと紙すきのワークショップも開催しました。

今、日本だけでなくヨーロッパでも手業で手間のかかる版画などのコースに学生が集まらない傾向にあります。それは高校までの美術教育にかける時間数減や、需要の少ない版画の材料を供給してくれる業者や職人がなくなりつつあることなど、問題は深刻です。

しかしそういう時代だからこそ、芸術大学で版画をしっかりと守り継承しつつ、新しい展開をしていく必要があります。

今回の企画では、他の2大学からコストや材料面にリスクのない新たな方法を仕入れることがで、本学のワークショップから2大学の教員・学生たちも学ぶところが多かったようです。

この展覧会に出品された版画75点は、3つの桐箱に75点ずつセットされ、最終的に各大学所蔵コレクションとなります。展覧会も各大学を巡回し、8月末にはKMTIL内のギャラリーでTVメディアも取材に来る中、大々的なイベントとして開催され、本学とUoBの教員・OB・学生たちも参加することができました。

2017年3月までにはUoBでも展覧会が開催される予定です。

西村正幸　美術学部アートクリエイターコース教授

アート＆デザインセンターでのオープニングで話をするダンカン先生

キングモンクット工科大学でのオープニングでKMTIL学長とカンジャナ先生とダンカン先生

ART WORDS FROM THE ART WORLD

板橋区立美術館でのボローニャ展展示風景

板橋区立美術館　副館長
松岡 希代子
Kiyoko MATSUOKA

芸術一話 第21話 絵本を作りたい人増加中!

板橋区立美術館という小さな美術館で、絵本に関する展覧会に携わって25年以上になる。基幹になっているのは、世界最大の絵本の公募展、「ボローニャ国際絵本原画展」の開催だ。この展覧会は、出版未出版問わず、絵本のために描かれた作品なら応募することができるため、新人作家の登竜門としての役割を果たしてきた。あわせて、板橋区立美術館では、絵本作家になりたい人向けの情報提供やワークショップなども積極的に開催している。美大の学生はもちろん、デザイナーやアートディレクターとして活躍している人も絵本の出版を希望する人は多い。なぜそんなに絵本にあこがれるのだろうか。メディアとして、絵本の魅力はどこにあるのだろうか。「消費されないで残る仕事がしたい」。イラストレーターから絵本作家になった人の言葉だ。たしかに、子どものころ読み親しんだ絵本を大人になっても大切に保管している人は多い。そして、絵本は個人的な記憶と結びつく。でも、それは個人的な思い出を絵本にすればよいということではない。長く読み継がれる絵本には、普遍的な物語が不可欠である。個人的な思い出であっても、読み手に伝わる内容が求められる。絵本の作り手を目指す人は、自分が伝えたいことを明確にして制作向かってほしい。絵本は一冊で一つの世界を紡ぎだすものだ。最後のページを読んで、本を閉じたとき、読み手の心に何かが残る。そんな作品を生み出せるのが、絵本の魅力なのだから。

予告

FUTURE EVENT 01

2016年度名古屋芸術大学アート&デザインセンター企画展「絵本作家 三浦太郎展こどもアイデンティティー」展

2016年10月21日[金]ー11月2日[水]14:00ー16:00
※10月29日(土)・30(日)10:00ー18:00(最終日は17:00まで)
開館時間12:15ー18:00　観覧無料　休館日10月23日(日)・31日(月)

大学卒業後、イラストレーターとして活動していた三浦太郎は、2001年のボローニャ国際絵本原画展の入選をきっかけに、絵本作家としてデビューしました。国内では『くっついた』を始め、『まかせとけ』などのはたらくくるまシリーズから最新作『おやすみぞうちゃん』のぞうちゃんシリーズなど、数々の人気の絵本作品を手がけています。一方で海外の出版社からは、『TON』『TOOLS』『WORKMAN STENCIL』など、グラフィカルで美しい作品も出版してきました。

三浦太郎は、読者の心理に丁寧に寄り添いながらも、実験的で新しい試みに絶えず挑戦し続けています。グローバル化し、情報過多な社会の中で、そうした環境を華麗に乗り越えることのできる稀有な作家です。

メインの企画となる「こどもアイデンティティ」は、実験的な新しい試みになりました。作家の豊かな想像力と、こどもたちに向けられた温かい眼差しが交差する作品です。また、国内外での絵本の原画や制作資料なども展示します。制作スタイルの違いなど、様々な方法論を見比べながらご覧いただくことができます。三浦太郎の絵本の世界を、存分にお楽しみください。

主催 ： 名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
企画 ： 名古屋芸術大学デザイン学部
協力 ： 子どもの本専門店メルヘンハウス

2016年度名古屋芸術大学アート&デザインセンター企画展講演会「絵本の可能性～こども・出版・クリエイティビティ～」

2016年10月22日[土]14:00ー16:00(開場13:30～)
場所　名古屋芸術大学　B棟大講義室
講師　三浦太郎×三輪丈太郎(こどもの本専門店メルヘンハウス)
※講演会はすべて入場無料、予約不要です。どなたでもご参加いただけます。

2016年のボローニャ国際絵本原画展の審査員を務めた三浦太郎と、日本で最初のこどもの本専門店メルヘンハウスから三輪丈太郎を招き対談します。絵本作家としての三浦太郎を深堀りしつつ、国内外の絵本の出版事情やボローニャブックフェアの様子などを伝えます。

作家紹介
三浦太郎
みうら・たろう

1968年愛知県生まれ。大阪芸術大学美術学科卒業。
イタリア・ボローニャ国際絵本原画展で入選を重ね、海外でも絵本を出版。
絵本に『TON』『WORKMAN STENCIL』(Edizioni Corraini)、『くっついた』『ゴリラのおとうちゃん』(こぐま社)、『バスがきました』(童心社)、『CO_2のりものずかん』(ほるぷ出版)、『りんごがコロコロコロリンコ』(講談社)、『おはなをどうぞ』(のら書店)など多数。

第21回ブラティスラヴァ世界絵本原画展『くっついた』(こぐま社)入選
産経児童出版文化賞 美術賞『ちいさなおうさま』(偕成社)
第23回ブラティスラヴァ世界絵本原画展『ちいさなおうさま』(偕成社)入選
新刊『おやすみぞうちゃん』(講談社)
2016年 ボローニャ国際絵本原画展 審査員

2016 10 - 2017 01 EXHIBITION SCHEDULE

Open 12:15ー18:00(最終日は17:00まで)日曜・祝日休館　入場無料　どなたでもご覧いただけます。
スケジュールは変更になる場合がありますので、ご確認ください。

10/ 7金→10/12水	ア”ーッ!ラジオ2016 & 大学院同時代表現制作展
10/14金→10/19水	洋画1コース3・4年展
10/21金→11/ 2水	2016年度アート&デザインセンター企画展 **絵本作家 三浦太郎展　こどもアイデンティティー**
11/ 4金→11/ 9水	「幼稚園児たちのゲイジツ2016」展
11/ 4金→11/ 9水	「Hand hospeace;医療と美術」展
11/11金→11/16水	MCDデパートメント品展
11/18金→11/23水	版の神髄;マルメから 2016展
11/25金→11/30水	メディアデザインコース展
12/ 2金→12/ 7水	洋画2コース2年生展欄会
12/ 9金→12/14水	ブライトン大学との国際交流20周年記念事業展
12/ 9金→12/14水	2015年度後期 留学生作品展
12/16金→12/21水	こどもの空間 絵本と椅子
12/16金→12/21水	洋画2コース4年三人展
12/16金→12/21水	日本画3年作品展
1/ 6金→ 1/11水	ガラス・陶芸コース2・3年生合同展覧会
1/13金→ 1/18水	日本画3年コース展

編集後記

子どもが生まれてから変わったことの一つに毎日絵本を読むようになったことがあります。そんな中で自分自身も嬉しい発見をしたり、小さい頃の記憶を思い出したり、思いがけずプレゼントをもらっているような気がします。おもしろいのは、子どもと一緒に読んでも全く違うことを感じたり、それは時を経て、時代や環境が変われば自分も同じであるとは限りません。なんだかとっておきの美術作品との出会いのようです。
作家が書いた時から100年経っても変わらない本。今日の一冊に10年後はどんな気持ちで出会うのかな。今の私に響く本はどんな本か。かつて子どもだった人へ、これから大人になる人へ、自分と存分に向き合えると思うのです。

平野恵美(アート＆デザインセンター)

最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄犬山線(地下鉄鶴舞線乗り入れ)徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行一準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります
自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
名古屋芸術大学 Art & Design Center
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地　TEL[0568]24-0325　FAX[0568]24-2897

Ble Vol.45
発行日　2016年10月15日
編集　髙橋綾子(美術学部美術文化コース)／平野恵美(アート＆デザインセンター)
発行　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地　E-mail adc@nua.ac.jp　URL http://www.nua.ac.jp

2016　Printed in Japan © Art & Design Center, Nagoya University of Arts

デザイン／印刷　サンメッセ株式会社

Open 12:15ー18:00(最終日は17:00まで)日曜・祝日休館　入場無料　どなたでもご覧いただけます。
スケジュールは変更になる場合がありますので、ご確認ください。

大学基準協会認定マーク
本学は2011年4月に、大学基準協会の大学基準に適合と認定され、認定評価を再取得しました。
認定期間は、2011年4月から2018年3月までです。
これにより、法令化されている「第三者による認定評価」にも合格したことになります。